

前 奏 トーンチャイム	讃美歌 111 神のみこはこよいしも
招 詞 詩編 98:1	聖 餐 式
讃美歌 102 もろびとこえあげ	讃美歌 207 主イエスよ、こころ
祈 禱	献 金 トーンチャイム
信仰告白 使徒信条 566	讃 詠 547 いまささぐるそなえものを
聖 書 イザヤ書 60:1~2	黙 禱
マタイによる福音書 2:7~12	主の祈り 564
讃美歌 109 きよしこのよる	頌 栄 542 世をこぞりて
説 教 『星を見て歩き出そう』	祝 禱
祈 禱	後 奏 トーンチャイム

「学者たちはその星を見て喜びにあふれた。家に入ってみると幼子は母マリアと共におられた(マタイ 2:10~11)」。マタイ福音書では父となるヨセフが大きな役割を担っているが、この時にはいないのか。いや不在なわけでもない(2:13)。不可思議にも「神の子」を授かったマリア、これからどうなるのか不安だった。そんな折に東方の異形の占星術学者が数名のつそり現れた。東方の人間をバザールとかで遠目に見たことはあるが、夜半に突如やって来るとは、マリアはもうビックリ仰天、嘔然となった。

同時にまた東方の学者らも嘔然となった。「ユダヤの王としてお生まれになった方(2:2)」なので、てっきり王宮にいるものと思ってまずそこを尋ねた。ところが星が導いたのは、庶民が住む粗末な家で(2:9)、希望の「ユダヤの王」は灯りもない狭い部屋に、「母マリアと共におられた(2:11)」。だがさすがに謙虚な学者たち、すぐに自らの先入観を反省し、謙譲の態度で最大限の贈り物を献げた(2:11)。

しかしそれにしてもなぜ、東方から、バビロニアか、もっと遠ければペルシャあたりから、わざわざ「ユダヤの王」として生まれた赤ん坊を拝みに来た(2:2)のだろうか。東方の、彼の地も暗い治世だったのか。戦争か飢饉か、秩序崩壊かローマ帝国による重税とかで、ことごとく荒廃していたのかもしれない。東方の学者たちは星の啓示を受け「異教の救い主」に望みをかけて旅して来たのだろう。

「見よ、闇は地を覆い、暗黒が国々を包んでいる。しかし、あなたの上には主が輝き出で、主の栄光があなたの上に現れる(イザヤ60:2)」。地を覆う闇はイスラエル領内だけでなく、東方の国々もそうだった。その闇に輝く出でる「主なる神」はユダヤ人だけのものではない。異教徒をも受容する、大きな救い。誕生した救い主イエスから始まる後のキリスト教は、むしろ異邦人において大きく花開くことになる。正統な信仰の中心地エルサレムの人々は、この根本的な救いに拒否的だった(マタイ2:3)。

「起きよ、光を放て。あなたを照らす光は昇り、主の栄光はあなたの上に輝く(イザヤ60:1)」。主の栄光は昇り、東方の、異教の、占星術学者らは光の星に導かれてエルサレムへやって来た(マタイ2:1)。ところが聖都エルサレムの民も王も、「光」を歓迎せず、馴染んでいる秩序に拘泥した(2:3)。「主の栄光はあなたの上に輝く」。それは「星」のようにほのかで、暗い街の、粗末な家の上に止まった(2:9)。

私たちも東方の学者のように、己が先入観を柔らかく手放したい。「主の栄光」が壮大で力強いもの、という期待を改めたい。輝かしい(イザヤ60:1)からといって、世の力とはまるで違う。クリスマスの星の煌めきは底知れない愛。星の光はほのかだが、どんなに遠くにいたとしても私たちを導き給う。星を見て歩み出し、先入観を手放して自由になる者を、キリストがおられる「そこへ」、招き給う。

私たちの先入観とは何か。第一に王宮という「力」。第二に聖なるエルサレムという「偉そうな信仰」。教会の中にも、私自身の中にも、「王宮」や「エルサレム」のような基準がつくられやすい。先入観を手放し、クリスマスの星に導かれ、私たち自身の、暗い夜の、慎ましいキリストの場に辿り着こう。

御子に出会った学者らは再び旅立った(マタイ2:12) その夜 夢を見たヨセフら三人も旅立った(2:14) クリスマスは夜の旅 月明かりか降るほどの星の光を集めてか 旅するように生涯を使い尽したい クリスマスおめでとうございます。12/24(水)6:00~7:00 燭火礼拝。次主日 12/28 は礼拝後に大掃除をします。2026 年 1/6(火)が顕現祭(公現日)、ここまでがクリスマスの範囲です。

礼拝堂・集会所の住所：408-0012 山梨県北杜市高根町箕輪 2265-3

連絡・問い合わせは牧師へ：408-0205 北杜市明野町浅尾新田 1324 TEL 0551-25-4008

メールkomechan.olive@gmail.com HP は「日本基督教団八ヶ岳教会」で検索して下さい。